



北の経営者たち

▲天塩町

福井県から入植した三代目 が拓く、新たな酪農の地平。

北海道北部の西海岸に位置する遠別町から、国道232号（通称オロンライン）を北上すると、まもなく天塩町のサラキシ^{*}に入ります。左手に日本海と遠目に利尻富士を望み、市街方向へ車を走らせても、行けども行けども地名は同じサラキシ。「ずいぶんと広い地区だなあ」と思うのは早合点。付近一帯の内陸部もまたサラキシで、



平成26年の飼育状況
経産牛55頭、育成牛35頭。採草地40ha、放牧地50ha。
乳量1頭当たり約7000kg、年間搾乳量約390t。

国道を逸れ農道へ向えば、それまでの海岸風景とは一変し、見渡す限りの牧場が続いていました。

そんな広大なサラキシに位置する(株)宇野牧場が、この地に入植を果たしたのは明治43年。福井県から来道し、開拓の鉄を下ろした初代宇野鐵治さんは、うるち米の栽培を始めます。しかし「耕耘適当ノ地乏シク泥炭地多キ」（植民地選定報文より引用）と言われ肥沃な大地とは言えない原野で、吹きつける日本海の厳しい風と冷涼な気候では、思うような収穫を得るのは難しかったでしょう。しかし、害虫や冷害に苦しんだり、凶作に追い討ち

をかけられても、開拓者は逃げませんでした。むしろそれを試練として受け止め、酪農業へ方向転換を図ったのが、二代目の保正さん。

しかし3年前に他界され、現在では三代目の宇野剛司さん（32）が父の後を継ぎ、105年にわたる開拓者精神を礎に、大きな夢と目標に向って挑戦し続けています。

従来の酪農のイメージと常識をくつがえす宇野牧場。

あなたはテレビで子牛の出産シーンを見たことがありますか？家族総出で母牛のいきみに合せて、子牛の足にかけたロープを引っぱ

宇野 剛司さん

株式会社 宇野牧場 代表取締役・牧場主

日本初の放牧と搾乳ロボット導入によって、 新しい北海道の牧場経営をめざして。 自社商品のスイーツ・アイテムも拡大へ。

り出産を手伝って…。実に感動的で、それがどこの牧場でも見られる光景だと思い込んでいました。ところが宇野牧場は違っていたのです。「朝、放牧地に行ってみると、夜のうちに子牛が生まれて、母牛のおっぱいを飲んでいました」。これはいったいどういうこと？宇野さんによれば「人間と同じです。牛も歩かなければ健康でいられません」。父の代までは牛舎で育てる「舎飼い」であったため、同牧場でも当時はやはり出産は大ごとだったとか。しかし宇野さんが父を説得し「集約放牧」という、従来の放牧とは異なる新しい放牧ス

スタイルへシフトさせてからは、牛は自然分娩するようになりました。「牛舎で配合飼料を与えられた牛からは多くの牛乳が搾れますが、歩かないので弱ります。ところがうちのようには牧草を食べ、自由に歩き回ると、ひとりでに足腰が丈夫になり、獣医や薬知らずの健康的な牛に育ち、出産だけでなくすべてが良い方へ循環していったのです」。

酪農学園大学時代から「近いうちに乳価が下がり、飼料の値段が上がるだろう」と予測していた宇野さんは、教授からニュージラノンドの放牧酪農を教えられます。同国は世界でも最も低コストで安全、かつ高い生産力を有する酪農国で、放牧スタイルのヒントをそこから得ました。

けた自社商品の拡大も図ります。搾りたての牛乳の味を再現し、大好評の牛乳豆腐に似た「トロケット・ウーノ」^{*}。パンナコッタ・ウーノ^{*}に続く新アイテムとして牛乳、ヨーグルト、ソフトクリームを予定しています。こちらも大注目です。



奥さんの友美さんが製造を担当する「トロケット・ウーノ」。プレーン、イチゴ、あずきの3種類。バッグやギフトBoxもある。



私のポリシー
「牛にできることは、牛にやってもらおう」

「集約放牧では、搾乳以外は人が関与しないのです。牛にできることは全部牛にやってもらいます。そうすることによって牛は自主的にストレスから解放され、酪農家も時間の拘束から解放される、まさに一石二鳥の双方に大きなメリットのある酪農法なのです」。そのため土壌改良と舎飼いからの切り替えに2年費やしたとか。専門的な話になりますが、良い土壌であるかどうかを客観的に判断するために「土壌微生物多様性・活性値」を測定しますが、宇野牧場では一般的に良いとされる値の倍、約200万を誇っています。

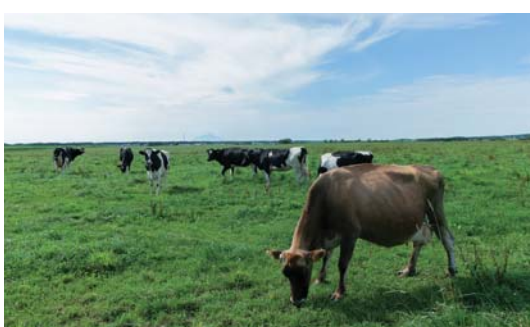
「面白いですよ。牛がうんこをしますと、まずハエが寄って来て表面の水分を取っていきます。次に

コガネムシ系がやって来て穴を開け空気を入れてくれます。水分が落ちたところからミミズが出て来て、彼らもカラスに食べられますが、2週間もすれば微生物によって完全に分解されるのです」。しかし、土だけでは十分ではありません。若く青々とした栄養価の高い短い草（15〜20センチ）だけを常に用意し、牛に好きなだけ食べてもらい、休みたい時に自分の意志で寝てもらおうのが重要だと言えます。「そのための集約化であって、放牧場所を区切りながら次々に牛を新しい放牧地へ移動させるのです。そうして空いた場所でまた草づくりを…。そういう循環を保てば、常に美味しい草を食べて育った乳牛から美味しいミルクが搾れます」。

宇野さんには大きな夢と目標があります。来年牛舎を新築されるのですが、集約放牧に加えて搾乳ロボットの導入を決めています。ロボットは現在も他の牧場で利用されていますが、すべて舎飼い。放牧ではまだ誰もやったことがない新しい挑戦です。「好きな時に牛が乳を搾れるようになってこそストレスフリーと言えるのです」と。放牧とロボット、この営農モデルが成功すれば、最も過酷な労働が機械によって自動化され、離農の進む天塩町や北海道の酪農を少ない人手で守っていただけるのです。さらに新工場もその後新設する計画で、6次産業法の認定を受



ゴクゴク飲むタイプではなくトロットとクリーミーなスイーツ



見渡す限りの牧草地で青草を食む育成牛(子牛)。手前の茶はジャージー牛。彼方に小さく利尻富士が見えている。

Company Profile

株式会社 宇野牧場 <http://www.unomilk.jp/>
天塩郡天塩町字サラキシ2015-2 TEL.01632-2-3218
設立/昭和20年3月25日 資本金/300万円 従業員数/3名
事業内容/牧場経営、洋菓子・乳製品の製造・販売

Personal Profile

宇野 剛司さん
昭和58年、天塩郡天塩町生まれ。酪農学園大学卒業。
平成17年に家業を担うために就農。酪農スタイルを、それまでの舎飼いから集約放牧に切り替える。
平成23年に6次産業化法に基づく認定を受け「トロケット・ウーノ」を発売。本年、北海道チャレンジ企業表彰を受賞。